

vol.31

自主独立というサーカス

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

明治初期の日本では単純欧化主義者vsアジア主義者の対立があったが、アジアを守るべく列強と戦うという武の路線を取れば、確実に植民地化していた。福沢諭吉の立場は欧米列強と手を結び、一定の力を得たら、アジアの解放に向けて乗り出すというものだった。その後の日本は武の路線を取ったことで敗戦とアメリカの属国化を招いた。戦後は、冷戦構造の中で軽武装対米従属路線を取り、戦後復興を成し遂げたものの、経済成長を達成し、冷戦が終わっても、主権回復はなされず、対米従属だけが深まった。日本がアメリカに隷属し、反日組織に奉仕している者たちが権力の中核に座っていることへの義憤は誰にも多かれ少なかれあるが、同時にこの期に及んで反米を唱えても始まらないとも思っている。そういう諦めの効能を説く人たちは極右、保守、リベラルを問わず、多数派を占めている。

近代にあつては、人格は試練を経て形成されるもので、誰にも修業時代があった。自我に対する超自我、すなわち良心や道徳、組織、国家などの抑圧から自己を解放するという物語が成立した。挫折を経験しつつも、より大きな人格の獲得を目指す過程はまさに教養小説、近代文学と重なるのだが、今は世の中がサブカル的、アニメ的になっている。いわばキャラだけあれば、人格も思想もいらぬ。修業も議論もいらぬ。その意味で政治もサブカル化しており、不愉快な現実を直視せず、極右政治家は戦前回帰のファンタジーに浸りつつ、欲求不満の解消を図れば、それでいいと思っている。

危険かつ無能なシベリアンが対米従属体質を強化し、改憲し、軍備拡張を目指すのは、子どもにピストルを持たせるようなものだ。対米追従には独自の戦略が伴っていないなければならない。時にアメリカを出し抜くような独自の外交、防衛戦略を実行しつつ、国民に最も利するという意味においての国益を追求し、かつ戦争を回避し、主権回復を達成する、そのようなサーカスが可能になって初めて、日本は主権国家の名に値するのである。

Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授